品川、御殿山の生活史的研究

進 士 五 十 八*

A Life-historical Study on Goten-yama in Shinagawa

Isoya SHINJI

摘要：本論は、品川御殿山の変遷を生活史的にみたものである。海辺の丘陵地形上の眺望のよい芝生地に、家綱・吉宗がサクラやハゼを植栽して、江戸市民春秋のレクリエーション利用に供すべく17C半～18C半に完成した「計画的公共緑地」であった。江戸の代表的名所として定着していたことは各種名所浮世絵に明らかであり、自然環境の変貌は各種絵図や地図に明らかである。生活史の後半は台場用土の供給、線路用地、宅地開発、都市開発で次々破壊されてきたことを明らかにした。

序

いわゆる江戸名所としての「品川の御殿山」は、その知名度において、又江戸市民らの行楽行動の実際において、それは又浮世絵などの画題として作品数において、いづれの面においても第一級の「場所性」をもっていた。

家綱のサクラ、吉宗のハゼ植栽の事実、享保6年御城内御制札などにみられる公共緑地の経営管理史面でも、近代造園以前に江戸市民を対象とした公共緑地行政があった事例を示す点で重要である。

しかしながら、上野、飛鳥山など江戸名所が明治6年の太政官布達第16号で近代制度の公園にうつがれたのに対し、品川、御殿山は幕末の台場造成用土の土取場となったこと、明治初年期の鉄道敷設による東西分断や私人邸宅に分割されたこと、そして現在再た都市再開発の名で高層住宅・業務ビル化計画が企画されていること等、破壊される方向で変遷してきた点が異なる。

本論は、我が国近代造園の先駆をなす都市近郊レクリエーション・エリアであり、名高い江戸名所のひとつ「品川、御殿山」の形成史、利用と評価、破壊へ向う変遷史を“生活史”的に概観するものである。

変遷史は全体を10に区分し、整理記載しつつ、御殿山の公共緑地的性格が完成し、さらに知名度が高くなって名所性を獲得し、やがて破壊されてゆく過程を明らかにする。そうした変遷をふまえた上で都市開発の潮流の中で史的空間をどのように位置づけ、又再生してゆくべきかを考えねばならないことを強調したい。

研究にあたっては①鈴木善太郎著、御殿山史（30頁のB6判 冊子で前島康彦蔵）、御殿山町会、1936、②品

川町役場編刊、品川町史・上、中、下、1932③品川区役所編刊、品川区史、1973、④東京市役所編刊、東京市史稿（遊園編）第一、第三、第七、1929、1929、1953、⑤金子光晴、増訂武江年表1、2、平凡社、1968（Ori.1848）を基本文献とし、併せて約20葉の絵画や地図の類、江戸名所図会、絵本江戸土産、新撰江戸名所、東都司馬八景、四季江都名所、東都八景、名所江戸百景、名園五十種など10数葉の浮世絵中、御殿山図を参照した。

（参考文献の表示は、基本文献は前出番号で、その他文献はその都度文末に記す。）

1 前史

嘉永6年（1853）、品川台場築造のため凡そ35万坪の土を掘ったが、この折戦国時代以前の古墳、古武器、遺骨などが出土し、これを法禅寺に納めて塚とした。〔①②〕これは、御殿山と称する以前に既に人跡のあったことを物語るが、白銀台から大井辺までは高輪が原と呼ばれ、御殿山の辺はその一部で足下は海であった。

源頼朝の家臣に品河三郎の名があり、その後裔の足利持氏の臣、品川左京亮が禅秀の乱（応永24）で討死して御殿山に館を構えていた品川氏は断絶した。〔①〕

次いで、「わが庵は松原遠く海近く 富士の高根を軒場（端）にぞ見る」と品川の館を詠んだ太田道灌が御殿山の主となる。康正元年（1455）の頃から24才～26才の3ケ年で江戸城に移るまでである。隣接する北品川稲荷社は道灌の父、資清が邸内に祀った氏神であった。江戸城に移っても文明6年（1474）には品川の館で連歌師心敬僧都を招いて千句の連歌を催している。道灌の死後は

* 東京農業大学農学部造園学科

家臣宇多川長清が住み、その子孫が品川神社の神職となっている。〔④〕大永年間（1521～27）には海岸通りができあがり後、慶長6年（1601）には東海道53駅の伝馬宿親宿として品川が位置づけられる。〔①〕こうして御殿山が歴史上に登る条件は揃った。

2 御殿山の成立

御殿山の地形を考えると、山ではなく台地である。武蔵野台地は一般に低く20～30mの台地面が多い。台地末端の小規模な台地を、江戸の市民たちは下から見上げるイメージで山と呼んだらしい。生活の背後にはドッシリと控えた山があることが望ましい。そうした市民の心情もあってか、台地末端には拠りどころとしての寺社が多く分布してもいた。〔江戸学事典、弘文堂1984P. 65〕

品川では、御殿山やハッ山（高輪台）と東海寺の関係がそれである。御殿山は、海岸線に近いところへ張り出て、高輪台につづく台地であった。『江戸砂子』では「木立ふりて芝生涼しき所なり」といわれ、『江戸名所図会』では「此所は海に臨める丘山にして数千歩の芝生あり」とあるように、海岸性の丘辺で、そこには芝草が自生した眺望のよい環境であったのであろう。〔④〕

品川の海辺につきて風光明媚な丘であり、東海道を面して交通要衝で道灌以来の歴史もあった場所である。そこに徳川家康は御殿をつくった。『江戸名所図会』には、「慶長元和の間、此の地に省耕（農民の苦労を察することの御殿ありし故に御殿山の号あり）とか、「寛永の頃、大將軍家御放鷹の時御設として、仮に建て置き給ひし御殿の地なりといへり」と書かれており、又、岸井良衛（江戸・町づくし稿別巻、青蛙房、1965、P. 22）は「慶長17年（1612）淀殿を人質にする含みもあって、関東御見物のため御下向と抑せ出され、その御隠殿としてこの地があてられた。一度御守殿を建てる土地とまでいわれたので御殿跡というべきを高台なので御殿山と呼んだ。」と考察している。いづれにせよ、幕府の行殿がつくられ、将軍が鷹狩りに出た折、休息所となったことは間違いなく、秀忠などは鷹狩りにこよせ西国から出府する大名を突然出迎えるなど外交政策として活用している。家光もまた鷹狩りが好きで御留場（将軍の放鷹のために庶民には禁猟を指示した地域）として品川を指定していて、度々足を運んだ。〔①②④〕毛利秀元に対して家光は、「品川の辺、山景ことに面白きところなれば、日頃御殿を建て置けり」と語っている。家光は又、大名への威厳と処分の場としても御殿山を効果的に活用した。例えば、寛永10年（1633）及同12年には「番士馬揃上覧」を挙行して威を示し、寛永9年（1632）の加藤忠廣（清正の息子）が御殿山まで来たが入府を許さず改易を命じる挙に出た。江戸の政治的関所であった。〔①〕

そうした立地に家光は、御殿山地続きの目黒川までの土地を澤庵和尚に与え東海寺を開かせてもいる。寛永14

年（1637）のことで、境内拝領地 47240 坪、添地 588 坪、外に朱引地 500 石が与えられた。〔②〕

おそらく東海寺が江戸の入口の軍事的意味をもっていたであろうこと、寺社が公共園地の管理者として隣接する例の多いことは一般的な傾向として理解できる。但し、御殿山の場合は、以後幕吏による直接管理がなされるので例外的であるが、江戸の入口の要衝であったことと御殿山や東海寺の設置は無縁でなかったはずである。品川の妙国寺の記録によると元和6年から寛永12年まで（1620～1635）の約16年間に將軍家が44回もお成りになっている。如何に重要な位置にあったか推察される。〔③〕

尚、家光は御殿山で度々茶会を催し、寛永13年（1636）には小堀遠州が林内の臨時の茶室で、寛永17年（1640）には毛利秀元につくらせた茶室で遠州と澤庵を召出してそれぞれ茶会を催している。〔①〕その場所の名残りが明治以後の日比谷邸内の自慢になっている。（後述）

3 公共緑地としての性格形成

白幡洋三郎は「花見と都市江戸」（中村賢二郎編、歴史のなかの都市、ミネルヴァ書房、1986、P. 192～214 所載）で8代吉宗が飛鳥山や御殿山に桜を植えさせたこと、即ち計画的な花見公園を実現したのが吉宗であることの必然性を考察している。

鷹狩りのルート上に花見の場が配置されていた事実を指摘し、鷹狩りで難儀を受ける農民への慰撫策として植桜があったこと、貴族的な花見が農民的なものに融合し、大衆的な群桜・飲食・群衆の三条件をもった町人的花見に育っていったこと、その場として都市と農村の接点である近郊地域が選ばれたこと等を述べている。

又、その中で「それまで江戸の町では桜はあまりみられなかった。関東ロー層の林のなかには桜は少なかったとみられ、当然群生地はなかった。」と述べて、それが人口急増の都市江戸の膨張と関連して、ヨーロッパにくらべ1世紀も早く飛鳥山・向島・御殿山など郊外に花見公園を誕生させたと分析している。この点は、品田穰（都市の自然史、中央公論社、1974）の人口密度の増大と行楽園の拡大は相関するという見解とも一致し、筆者もほぼ同意見である。

ただ、白幡が吉宗に植桜と花見公園の業績を与えている点は、「これ府内近きほとりに、名勝をひらかせたまふべしとの御事とぞ（徳川實紀、有徳院殿の項）」とある通りであるが、又同様に、享保2年（1717）及び同11年（1726）向島に、享保5年（1720）飛鳥山への植桜が記録にある通りであろうが、御殿山については名勝桜の名所として評価定着の可否は別として、吉宗以前に植桜の事実があったのではなかろうかという疑問が残る。

即ち白幡も引用しているように『再校江戸砂子（明和9年（1772））』の御殿山の項に書かれている「此の山に桜

樹多し、寛文^{ワイド}の比^ヒ、吉野の桜苗を植させたまふと。今古木となりて花こと更^カうるわし。毎年花見の貴賤群をなす。絶景の地也。享保のころ、又所々に^{ヘジ}櫨を植らる。」(傍点筆者)をどのように解釈するかである。

『東京市史稿』遊園篇第一〔4PP. 890-3〕の解釈を白幡は採用しているようで次のようになっている。

「御殿山桜樹植栽 品川御殿山ハ相伝ヘテ太田持資品川館ノ在リタル所ト為ス。徳川氏ニ及ビ行殿ヲ設ケ、元禄同禄後之ヲ廃シ、享保ニ至リ桜樹ヲ栽エテ四民遊観ノ場トス。再校江戸砂子植桜ヲ寛文中ノ事トシ、諸書之ニ仍ル。而モ享保前ノ諸書此地桜花有ルヲ伝ヘズ、現ニ江戸砂子ニモ其事見エザレバ、今新編武蔵風土記稿等ニ從フ」

即ち『新編武蔵風土記稿』(大日本地誌大系3、雄山閣1957)の御殿山の記事とは次のとおりである。

「歩行新宿大横町ノ西ニアリ。広サ3町8反5畝29歩。今御林トナリ桜樹多シ。有徳院殿(吉宗)和州吉野山ノ種ヲ移シ植ラレシ所ナリト云。文政9年ニモ命アリテ数株ヲ植添ラレ、春毎ニ看賞ノ客多シ。其頃北品川宿歩行新宿ヨリモ願上テ、桜楓松若干株ヲ植添シト云。享保6年2月山上ニ制札ヲ建テ、遊人ノ狼籍ヲ禁セラレル。

(傍点筆者)」

上記2点の引用文から、吉宗が享保年間に吉野桜を移植して庶民遊観の、現代的に言えば公共緑地として整備を図り、それには地元の要望もあったとか、制札を立てて管理したとか、桜の他に楓や松なども修景植栽したと書かれている。確かに公共緑地として享保頃から性格づけられてきたのであろう。しかし、その芽ばえは享保期まで待たなければならないであろうか。

筆者は『再校江戸砂子』にあるように、寛文の頃(4代家綱)を採りたい。理由は、品川が東海道の親宿になって発展し多数の旅行者が集っていて遊観の場を求める条件は早くからあったであろうこと、家光の頃には諸法度が完備し江戸開府以来の情勢は安定期に入っていたであろうこと、安定社会では上方の年中行事のひとつである花見を試みようとする動きがあっても不思議ではないこと、享保期では開府以後百数十年を過ぎており、盛況さや名所形成が始る時期であって植桜の試みが起るのに百年もかかるとは考えられないこと、安定期に入って半世紀を過ぎれば植桜の気運ぐらいいは起るであろうこと等である。白幡は吉宗説(享保説)をとるのに東京市史稿の見解に加えて、『再校江戸砂子(前出)の「今古木となりて花殊更うるわし」とあるのを、古木で花勢が良い状態というならば『再校江戸砂子(1772)』の出る37年前『続江戸砂子(1735)』即ち享保20年頃が妥当である。寛文(1661-1673)では早すぎるとも分析している。

しかし、ヨシノザクラの古木といえ、むしろ百年ぐらいいを言ってもおかしくはないだろうし、30-40年生を古木とは言わないのではなかろうか。いわゆるヤマザク

ラの植物分布は関東平野に広く、海岸部にはオオシマザクラが分布していたと思われるから、御殿山付近にも当初から群生はせずとも分布することはあったであろう。白幡の指摘するように群桜・飲食・群衆の要件をみたす花見の名所形成は享保の頃から熟成したであろう。しかし筆者の見解では、『再校江戸砂子』にあるように寛文期(1660年代)、或いは文献にはなくともそれより以前、すでに既存のヤマザクラやオオシマザクラを含め自然林としてのマツや雑木と芝草地の眺望を楽しもうという人々はあったと考える。海岸線に目立つ形で丘があり、その下には品川宿がある。多数の人々の眼にとまる立地にかつて御殿のあった山という文化性もあるし東海寺という参拝場所もある。しかも、4代家綱は父家光の愛した御殿山を大切にすることが孝道に通じると考えるような人物でもあった。加えて、江戸開府以来半世紀を過ぎて市民行楽の文化的要請はわずかつつ強まってゆく社会的背景もあった。以上のような点を総合的に判断すると、寛文期との記事は、他の本にみられないとの点からだけ否定するのは疑問である。諸書にみられずとあるが、『武江年表』の「此年間 寛文」の記事には「品川御殿山へ桜苗を植させらる。」とあるし、『江戸名所図会』も寛文説を支持し、後述の『江戸図解集覧』や「享保3年(1718)吉宗は敷田敬直に命じて、吹上御庭の黄櫨^{ヘジ}を御殿山に移植させた。黄櫨はその実から蠟^{ロウ}を取るためによく栽培されたものであるが、御殿山に移植した目的は専ら秋の紅葉の美を添へるためであった。このときから桜のほかには紅葉の名所としても知られるようになった。

〔①〕(筆者注・専ら美を添へるためとは誤りであろう。おそらく吉宗はハゼロウをローソクの原料として殖産興業策として植えさせ、その結果観賞にも供するという方針を示したものと思う。吉宗将軍就任間もない頃でもあり、そうした思想啓発のデモンストレーションとして御殿山が活用されたのであろう。文政7年ハゼ60本の記事があり、天保7年に家城信七郎が櫨絞所を御殿山内に設けた記事がある。〔③〕)」などとあるからである。

但し、筆者の手に集めた図会などは、寛政9年(1797)の『東海道名所図会』をはじめ、天保元年(1830)の『一幽斎東郡名所』、天保5年(1834)の『江戸名所図会』、嘉永3年(1850)の『絵本江戸土産』、安政3年(1856)の『名所江戸百景』などであり、この他年代不明のものを含めて安藤広重(1797-1858)作品9枚である。いづれも寛文から享保のものではなく、いわゆる江戸名所としての商品価値が形成されて以後のものである。寛文期植桜の証拠とはならない。絵図類も又同様で大衆的交通事情が生れて以後の文化文政からのものしか無く証拠とはならない。従って、前述の考察は推論にすぎないことになる。なおこうした浮世絵分析からは名所の景観構成の特徴が考察されたが他に譲る。

4 江戸名所としての賑い

吉宗の将軍在位期間は享保元年(1716)から延享2年(1745)で30年間に及ぶ。江戸中期の町人文化の成熟期でもあった。前節でも述べたが既に芽のあった江戸市内外の行楽地候補を鷹狩りなどを通じて視察するなかで、民心慰撫策として整備強化していったものと思われる。

御殿山も、『江戸図解集覧』では「享保の比、櫓を植らる。……東方に海を眺望し、西に富士嶺々と聳へ、桜花繽紛としてその詠殊によし、貴賤群集す。安永天明の比迄は山下に茶店ありて、額堂などありて文人墨客随意に休句を掛る。(傍点筆者)」と記され、春のサクラ、秋のモミジに群集が遊観し、即興の詩を板に書きつけて掲げる額堂までできていた盛況ぶりを紹介している。

水江漣子の見解(前出、江戸学事典P. 61)では、「江戸名所は、ごく初期においては中世末からのこされた歌枕として隅田川沿などに伝えられた。やがて各地から出府する地方侍や婦女が江戸を見物したくて名所旧跡が繁昌するようになった。元禄前後のことであろうか。さらに享保から延享にかけ江戸は生活の場として整備がおこなわれ人為的な名所がつくられてゆく。隅田川の土堤、王子の飛鳥山、品川の御殿山などに桜や楓が植えられるなど四季の江戸庶民のための行楽地が設けられるようになった。」とある。

江戸中後期の御殿山の姿は、水江のいう江戸庶民四季の行楽地であった。花見、紅葉狩の他に、山下の海岸で汐干狩りもあった。社寺の参詣もあった。しかし、重要なのは、江戸名所とは、「1本の名桜を静かに楽しむといったものではない(白幡P. 207)」という点である。

名所とは、大衆化による知名度の向上が前提となる。大衆化には飲食・女性がつきものである。

品川宿の食売女は、明暦3年(1657)の大火で吉原遊郭が淋しい浅草田圃に移転したこともあって万治2年(1659)には公許され、天保15年調べでは品川3宿の合計で食売旅籠屋94軒、食売女1348人、これを手引きする水茶屋14軒(天保14調べ)、ほかに高輪茶屋と称するものの130余軒があった。〔①〕

品川宿は御殿山下にある。従って、江戸名所としての賑いの実態は上記風俗と一体化したものであった。上野山の観桜でさえも次第に派手になっていったが、御殿山は都心から最も遠い別天地の様相があったはずで、歌妓、帮間、色街の女などが賑いの一面を演じてもいた。〔①〕

以上の様子は、それ自体が江戸土産の商品となって出廻る「名所図会」や「浮世絵」のなかに詳しく描かれる。

そこには幔幕を引きめぐらしたり、敷ゴザのなかで花見する姿、歌舞音曲の酒宴する多数の人々が登場する。そして又、その絵が更に名所としての名を高めてゆく。大衆化時代の行楽風景地の名所化現象は、直接的には品川宿の賑いなど周辺の景観的・風俗的事情により、間接

的には名所絵の板行普及という文明史的事情、そして江戸町人社会の成熟というレクリエーション(余暇と費用)史的事情の相乗作用のなかで展開したと考えられる。

5 高密度利用による環境破壊

御殿山変遷史の後半は全て破壊への歩みである。第一波は、名所としての多数利用の園地破壊であり、土取場利用の第一例となったことであり、都市化に応じて空間地として御殿山の敷地が各種公的利用の用地として狙われはじめた、といった内容である。

文政7年(1824)の『宿差出明細帳写』には、「御殿山御林3町8反5畝29歩 木数1,415本、内 桜600本、松5本、櫓60本、雑木750本」〔②〕とあるが同じ文政の頃『遊歴雑記』には、「此山平かに芝一面に生じ、さくら数千株とところどころに繁茂し、八重あり一重ありて花いろを競ひ咲といへども、桜木の御植付もなきにや、或は立枯し又は風折して……」〔田中正大、日本の公園、鹿島出版会、1974、P. 41(傍点筆者)〕とあって、600本と数千株の相違が気になるが、それ以上に、補植の様子が無いこと、立枯れ、風倒木のことなど園地の荒れ方が注目される。それは、享保6年(1721)に林内に高札を立て、「御林内諸木の枝を折採者有之者 又は狼籍者有之者 捕面召連可訴もの也」と命じていることとも関係する。高札は林内3ヶ所に建て、こわれたら北品川宿の責任でまた建てている。文政9年には、幕府の御植物方で桜や櫓を捕植した記事もあるから、幕府も地元も無策ではなかったことが明らかであるが、しかし、高札を要するほど荒れていたことも立証される。園地の破壊は利用度に比例したであろう。〔①②④〕

次の破壊は、宝暦9年(1759)で江戸城二の丸地形土採掘のため山の脇に3,000坪の土取場が出来たことである。文政11年(1828)須原屋茂兵衛蔵版『分間江戸大絵図』に「土トリバ」とあるのがそれであろう。幕末のお台場造成用土取場の先例となった。〔①、同絵図〕

江戸の6割は武家地、2割は寺社地、残りが町人や畑などであるが、江戸中期には人口100万都市となるが武家も宅地の制限を受ける(800石～1,500石は30間×30間、7,000石～10,000石は50間×50間とする等が寛永2年に決定)ようになる。御殿山の周辺もこうして絵図にみられるように、加藤能登守、松平出羽守、有馬日向守などの屋敷地が出来、町家も続くようになった。更に絵図でみると「元大ヅツ ケイコバとかゴ用チ」とあるように、鉄砲稽古所が享保12年(1727)につくられ、さらに隣接して絵図に「塙」とあるのは寛政10年(1798)に国学者塙保己一が『群書類従』の板木置場として用地を借受けたことが見え、幕末までつく。こうして御殿山は内外から破壊されてゆく。〔①、絵図、地図類〕

6 江戸湾台場造成用土の土取場として大規模破壊

御殿山の公共緑地性と名所性を致命的に破壊したのは、

幕末のペリー来航による江戸湾防御にかかる御台場建設に伴う膨大な埋立用土の採掘であった。

嘉永6年(1853)、米艦浦賀に來り、壤夷論盛んに唱えられ、江川太郎左衛門英龍の献策によって砲台を建設することになった。江戸内海の測量の結果、第一候補は旗山・十石崎・富津間の出州が挙げられたが、急いでつけないとの議論があって品川海上に建設されることになった。『嘉永明治年間録』に「八月初旬非常為御手当品川海中へ、大筒台場11ヶ所新規御築立仰せ出さる。」とあって、三浦石、三浦土丹岩に加えて土砂を1~2万坪、各御台場ごとに積書きされている。実体は、東120間、西96間、南112間、北110間、平坪11,988坪、高さ5間、総坪59,940坪に及び嘉永6~7年(1853~4)土運びの通路にあたる家は壊され往来止めにし、工事がすすめられ1番から6番台場を同7年に完成した。11ヶ所の予定が財政窮乏で6ヶ所でやめたのである。〔②①〕

こうして大規模破壊のあとの御殿山には、皮肉にも開国後、文久元年(1861)に「品川御殿山近辺一円外国人館出来ニ付、畔鐵人足数千人入地平始ル」と『外国貿易場所開港見聞記』に書れるように起工式がなされ、翌2年(1862)正月には英国公使館だけが落成している。但しその年の12月には井上馨、高杉晋作、伊藤春輔ら13人の浪士によって焼払われてしまっている。〔②④〕文久2年(1862)の焼打ち後は外国館は再建されなかったが、その位置はハッ山から御殿山にかけての15,000坪の土地であった。

7 鉄道線路工事による東西分断破壊

中村良夫(風景学入門、中央公論社、1982、P. 85)は国鉄の京浜東北線沿いに北から南へ大江戸を串刺しにする「山里構造線」があったとしている。即ち、それらは東京の山水を象徴するラインで、飛鳥山の桜と音無川の清流、根津の里、寛永寺と不忍池、江戸城や霞ヶ関や愛宕山あたりからの江戸湾眺望、増上寺山内の芙蓉洲弁天社、御殿山の海と花と、江戸名所が点綴しているという。

このことは、連続したスカイラインのなかに名所のコンテクストも流れていることを指摘していると同時に、連続していることによる効果や価値をも示唆している。江戸東京全体の中での位置としても御殿山の意義を確認すべきである。それはまた、御殿山の細分割が如何に大きな打撃であるかも示唆している。明治2年(1869)鉄道建設が決定し、翌年から測量開始、明治5年(1872)には鉄道が日本で始めて開通した。御殿山はこのとき東側半分が切りとられた。鉄道が真中を南北に通ったためである。

大正3年(1914)の『風俗画報』には、「明治5年京浜間の鉄道を創設するにあたり、山の東部を南北に横断して、更に光景を一変し、20年以後山上に家屋を建設するに至りて、此名所は終に全滅せり。」〔(傍点筆者)、

田中正大〕とある。但し、明治21年7月(1888)内務省地理局出版の1/5,000地図によると、「北品川宿、字御殿山耕地」と書かれて、鉄道が谷間を通るように真中を貫通しているものの、御殿山の敷地の土地利用は些程宅地化されていず、樹林や農地状の様子であったことが知れる。この地図の後に、私人の土地利用へと変化していったのであろう。

8 私人の豪邸に分譲・公共性の消滅

御殿山の自然が今度は私人に囲いこまれた。それによって公共性は破壊されてしまった。そのかわり明治期の庭園活動の舞台として登場することになった。

『風俗画報』の記事のように明治の半ばから末にかけて鉄道で分断された御殿山の土地は、貴顕富豪の手にわたり、明治末の地図(42年測量)によると、鉄道の東側に、北に伊達邸、南に日比谷邸が、鉄道の西側には、北に原邸(一部現存)、南に益田邸の名がみえる。原邸の北側にはこれも現存する開東閣の前身岩崎邸の名がみえる。

これら4邸の中、原六郎邸、益田孝邸、日比谷氏高輪邸の3邸は、明治43年発行の近藤正一著『名園五十種(博文館、1910、PP. 44-7, PP. 242-51, PP. 314-19)』に、詳細な庭園見学記と各1葉の写真が残されている。

特に、原六郎邸(一部現存)の庭園については、明治大正と活躍した造園の大家の小沢圭次郎(号は酔園)の「原氏園亭遊覧ノ記並序」と「原氏娛天苑設景図説並序」の長文記事が『日本園芸会雑誌(1894)』に掲載され、具体的な内容がわかる。これは、小沢が明治27年(1894)4月8日に日本園芸会第18回小集会の会場となった原六郎邸での庭園遊覧にもとづいて園景を筆記したものであり、その翌明治28年(1895)冬に囁を受けて造庭に着手するときの考え方を記述したものである。

小沢圭次郎作品の作風や意匠を知る上で貴重であり、又、明治中頃の日本庭園像を明らかにする上でも貴重であるが、ここでの趣旨ではないので別途の検討としたい。

いづれにせよ、私人に分譲したことで名所としての御殿山の「場所性」は大きく傷ついてしまったわけである。唯一の救いが明治庭園の舞台となった点であらうか。分譲する前に公園化する動きが何故出なかったのだろうか。

9 宅地の細分化による緑の破壊

御殿山の公共性が私人邸宅化によって破壊されても、その自然環境性は原邸で約20,000坪という大規模区画であったために保全されていた。

ところが、御殿山下の目黒川沿いは出水頻度の高い価格の低い土地であったことと、容易に工業用水が得やすいということもあって比較的工業化がはやかった。御殿山には品川白煉瓦(明治20年)、明治ゴム(明治33年)、三共製菓(大正2年)、森永製菓(大正4年)、富士電気(大正6年)がそれぞれ立地した。山手線が全通したのは明治31年(1898)であり、京浜電気鉄道が開通した

のは明治38年（1905）である。さらに第一次大戦や関東大震災の影響で品川の工場立地は盛んとなり、芝浦埋立地では明治39年（1906）から大正7年（1920）の間に110万㎡、昭和に入って95万㎡が追加、品川沖合にも90万㎡が埋立てられ大工場が立地することになった。

こうして御殿山の富豪の邸宅も周囲の自然が宅地化してくることで追いつめられ、明治42年の1/5,000地図では原邸の西側に余白があったものが、昭和12年の1/5,000地図では境界線に近くまで西側一帯が宅地に細分割されてしまい伊達邸の名は地図から消え、原、益田、日比谷の3邸のみが空閑地を見せその周辺一帯は完全に宅地化が進行してしまっている。1/25,000地図の大正6年（1917）にはあった御殿山の記名が昭和7年の地図では消えている。

戦後になると原邸を除いて土地利用が変わり、日比谷邸の後は集合住宅（郵政省社宅）に、益田邸の後はビルマ大使館になり緑は大きく後退してしまっている。

原邸もまたそのままではあり得ず、北側に品川教会その他の民家が西側にユーゴスラビア大使館その他の民家がおしよせて、原六郎時代に作庭された東側低地（池）とその斜面林及び斜面上の平地が残存して、都市砂漠の中で緑の孤塁を守っている。〔日本図誌大系・関東Ⅰ，朝倉書店，1972，PP. 71—7，この他当該地図〕

10 都市再開発による原邸の環境の大改变

御殿山時代の地形や緑（植生）の名残りを、唯一現代に伝えているのが原邸（原美術館）周辺である。

しかしながら、土地相続の困難さなど都市における自然や文化保存上最大の矛盾である土地税制の不備の結果御殿山の名残りが消滅しようとしている。

原氏の後継者らの切実な希望は、ミニ開発で完全に跡かたもなく原邸の名残りを消すことだけは避けたいということであった。そのために、原美術館及び周辺一帯を区画として総合設計制度、後特定街区制度を活用して高層業務ビル及び高層住宅棟を建設し、そのかわり低地の

池及び斜面林地などの自然植生保全を図ろうという開発計画を立案した。計画者は原邸の土地を購入して地権者の一員となった森ビル開発株式会社で、他の地権者11名と共同しての再開発事業となっている。

この動きは、昭和52年（1977）に始まり、翌年には御殿山町会役員や近隣への説明会が開かれ、その結果、昭和54年（1979）には、反対陳情が東京都宛に、反対買上請願が都議会に出されたが都議会解散に伴って審議未了になってしまった。反対の代表者は斉藤義道で「原邸敷地内の自然を残すべく都は公的利用の用地として買収を検討し周辺環境保全処置をとること、大規模高層マンション建設には反対で建築確認をおこなわないこと」を内容としている。

ところが地権者は昭和54年（1979）以後、庭園を近隣住民に春秋3回開放し住民との個別話し合いをつづけ、他方で東京都都市計画局都市計画課宛に文書で土地売却の意志の無いことを通知した。同年末には、都及び区議会に開発促進の請願（代表者、石川勝品川連合町会長）が出され、翌昭和55年（1980）1月に第1案が出され、3月に区議会はこれを採択、7月区は開発指導要綱にもとづく「協議書」を締結、12月には総合設計許可申請、一団地認定申請を区経由で都に提出するにいたった。その後、地域地区変更反対の陳情などもあったが、昭和59年11月第2案、昭和61年10月第3案が品川区の都市計画審議会で説明され、同昭和61年（1986）12月区及び都の都市計画審議会でも審議された。但し第3案は昭和61年9月に都市計画決定されたばかりの「東京都（区部）都市再開発方針」の再開発促進地区の下で特定街区として計画され、現況は「第二種住専（容積率200%，建蔽率60%）」であるのを、「住居」地域地区指定にかえ、実質的には容積率299%，建蔽率42%，地下3階地上21階事務棟、同25階ホテル・住宅棟、最高高さ110mを建設する。人工的緑化を含めて50%である。果して御殿山の保全策は他になかったのだろうか。

SUMMARY : This study is about the changes of Goten-yama in Shinagawa from the viewpoint of the life history. Goten-yama was constructed on a seaside lawn hill with a fine prospect by Tokugawa Ietsuna and Yoshimune in the mid-seventeenth to the mid-eighteenth century as a “planed public openspace” for the people of Edo placing it at the service of their recreations in spring and autumn seasons. It is evident that this place was widely known as a noted place of Edo from various Ukiyoe described noted places. This study confirmed that its changes in natural conditions from various albums of noted places and maps. The concrete changes were destruction caused by soil supply for constructing Daiba, land supply for railroad and housing site, and city development.